

王 思文 (オウ シブン)

中国出身

日本女子大学 文学部日本文学科

人形浄瑠璃『阿弥陀胸割』

夏休みの末に、オンラインで、「阿弥陀胸割」という人形浄瑠璃の演目を観た。初めて人形浄瑠璃を観たのは、日本語学校にいたときだった。4 年前より、少し古典芸能についての知識は増えたと思う。ただ人形操りの面白さだけではなく、その作品に現れる時代的、社会的なものも注目するようになった。

「阿弥陀胸割」は、天竺の姉弟が、悪事を尽くし魔道に墜ちた両親を供養するため、身を売る物語である。両親の驕りを子が背負い、孤児になった姉弟は苦しい生活を送り、更に親を供養するため身を売ることとなる。身売り先の息子(松若)の難病を治す薬にするため、姉(天寿)は生き肝を差し出し犠牲となるが、阿弥陀の胸が割れ、人間と同じ血を流していた。阿弥陀が身代わりとなり姉は救われ、やがて松若の御台となり、弟は阿弥陀堂の住僧となる霊験譚である。

オンラインで見た資料の画質はあまりよくなかったと思うが、何回も繰り返し見ることができたことが本当に良かった。

一番印象が残っているのは姉の天寿の胸から、生き肝を取り出すシーンである。同じ生年月日に生まれた天寿と若松が全く異なる人生を送っている。生薬である女の子と薬を飲む男の子の設定は、非常に劇的である。本作が上演された社会背景については、天寿の生き肝を胸から取り出す描写が非常に残酷だと言われるが、「血潮」「血煙」などの言葉は、仏教を表すことではなく、キリスト教とキリシタンを比喻している」という説がある。更に、当時の時代背

景として、本作が上演される 1 年前に、徳川家康によりキリスト教禁止令が発せられていた。またキリスト教の殉教思想が古くから存在している。殉教者の言語は、もともとイエスの生涯と復活の証人として使徒たちのことを指す。この社会背景を踏まえ、本作の最後の部分はキリシタンの殉教を暗示している可能性が高いと考える。

人形浄瑠璃のみならず、狂言、能楽、歌舞伎も、文学や文化などの価値以外は、時代的、社会的な意味がある。古典芸能の面白さを鑑賞しながら、歴史や文化などが理解できることは文楽や能楽などの独特な魅力だと思っている。